



緑園の授業 ～ 生活の中で活かせる英語力の育成～

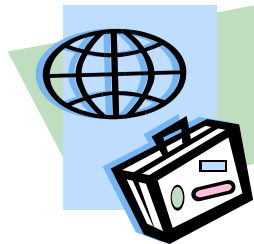
冬休みを目前にしたある日、リーディングの授業を見学しました。授業開始後、しばらくして教室に入ったのですが、生徒は教室の壁際や窓辺に置かれた椅子に座っています。教室の中央には伊東先生しかいず、先生は机の配置を考えていました。何事が始まるのかなと興味津々で見ていると、英語で「道案内」について勉強することを生徒に伝えています。

先ほどの机の配置を見ると、机はブロックにまとめて置かれており、いくつかの机の上には、施設名の書かれた大きな紙が置かれています。「Bank」「City Library」等、10枚程の紙が置かれています。

伊東先生は、2人1組のグループを呼び出し、スタート地点に立たせます。外国人役の伊東先生が質問し、生徒は質問された施設までの道順を英語で教えなければなりません。

「コーヒーショップはどこにありますか」
「真っ直ぐ歩いて二つ目の角を右に曲がり、銀行の隣です」

このやり取りを英語で行います。目の前には仮の町の風景が広がり、分かりやすく英語で伝えなければなりません。



スラスラと説明できるグループ、つかえつかえ教えてもらいながらやり遂げるグループ等、さまざまでしたが、各グループが2回、体験しました。

ロールプレイを経験することで身体を通して英語を使えたはずですが、体験によって生きた英語を学ばせる、ということだと思えます。伊東先生は丹念に英語で語りかけながら、生活の中で活かせる英語力を身につかせようとしていることが伝わってきます。

横浜や鎌倉のある神奈川県に住む私たちは、外国の旅行者の方を目にする機会が多いです。道を尋ねられたら、何とか丁寧に伝えたいと思うのですが、英語がうまく出てこず苦労します。困っている相手のために、絵を描いた手振りで伝えようとするのですが、英語で伝えられれば何よりです。

言葉は人と人をつなぐ架け橋です。役に立ちたいという思いと共に、実際的な手助けができたと思います。2020年はすぐそこです。多くの道に迷っている外国の方に道を聞かれても、にこやかに笑って役立つようになりたいものです。

「手話Ⅰ」公開授業 ～ 伝え合うこと

1月15日(木)の手話Ⅰの授業は公開授業でした。県から指導主事の方が2名、他校から2名の方が参観にみえました。

この日の授業は、聴覚に障害のある方を講師に招き、手話によってコミュニケーションをとることが目的です。8か月間、学んできた手話が通用するのか、生徒も緊張しているようでした。

この日の講師は、松下靖紀さん(泉区聴覚障害者協会会長)と、前田忍吉さん(泉区聴覚障害者協会顧問)のお二人です。

私が教室を訪れた時は、8人ずつ2グループに分かれ、松下さんと前田さんを囲んでインタビューをする場面でした。

生徒はまず手話で自己紹介をします。自己紹介だけでも、簡単に伝えることができず、助けてもらう人もいます。手話だけでなく口話もまじえ指文字もまじえて気持ちを伝えようとします。松下さんも前田さんも表情豊かに一生懸命、生徒の手話を受け止めようとします。しかし生徒の質問がちょっと複雑だと伝えられなくなります。

そうすると、前田先生が間に入って何事もなかったようにパイプ役を果たし、実にあっさりとお互いの意思をつなぎます。

松下さんも前田さんも、手話と口話と同じくらい表情や身振りで伝えようとしています。生徒は簡単には通じないことがわかり、皆が集中して発信しそして受け止めます。「一番困ったことは何ですか」「一番楽しかったことは何ですか」「聞こえない人に対して注意してほしいことは何ですか」等、準備した質問を順々に聞いていきます。松下さんは生徒に「命を大切に生きて、学んだことを活かして社会で生きてほしい。自分は不幸と感じない。不便なことはあるが皆で協力して乗り越えることはできる。」こう伝えていらっしゃいました。

前田先生がお二人にこう尋ねました。「親としてどういう苦労がありましたか？」それに対して「言葉のおくれは多少ありましたが、親としてのしつけは注意深く、鑑となるよう気を付けました。」

お二人は本当ににこやかに人柄の温かさが伝わってきました。生徒は苦労しながらも自分にできる方法を使って、お二人の心に思いを伝えようとしていました。「伝えよう」重さを感じてくれたようです。

校長 遠藤 誠